

『家族で生き残ったのは この子だけ (WCNSF)』

——ガザでは、10分に1人の子供が殺されていく——

「国境なき医師団」中嶋優子医師に“ガザ”を聞く

国境なき医師団日本会長の中嶋優子医師からガザの状況を聞く機会がありました。
(2024年2月20日・我孫子アビスタ)

2023年11～12月の間麻酔医としてガザに入った様子を語る前に、「国境なき医師団」(MSF)について説明しました。

1971年医師・ジャーナリストによって組織され“非営利”“非政府”の立場で医療・人道支援活動と証言活動をする団体。それ故財源は97.1%民間の寄付によっているとのこと。“独立・中立・公平性”をもって説明責任と透明性が求められる。医師、スタッフ合わせて4万9000人、世界75カ国の紛争地域などで医療等の支援活動をしています。



中嶋さんは2009年にMSFに登録しナイジェリア・パキスタン・シリア・イラク・・・などで活動。2023年11月～12月の間パレスチナ・ガザ地区に入ったとのこと。

入ってすぐに感じたことは「これまでの地域とはまったく違い、一番ひどい状況」とガザの状況を語りました。

10/7 ハマスの攻撃後 10/14 にガザでの麻酔医として派遣要請があり応じたとのこと。派遣された医師はヨーロッパ系10人・南アメリカ系2人・アジア系1人の13人で構成。

まずガザに入る前に、エジプト・イスラエル・ハマスの同時の許可がないと入っていけないので困難を極め11/14にやっと入れたとのこと。



ラファから入るに食料・水・生活用品を各自持って入ったものの、水・光熱はまったく不足し夜間のドローン空爆で不眠状態。

ナセル病院(300～400床)での活動になったが、病院内にはすでに1000人以上の患者さんがおり、そこにガザ北部からの避難者が次から次と入ってきていた。これまでの一日の手術人数10人を20人に拡大したとのこと。

夜間空爆で停電になり携帯ライトで手術することも。救急隊は空爆された所へ入っていき、まだ助けられる人々を見つけて病院へつれてくると。

10歳の女の子は空爆で骨折・熱傷もひどい状況、延命するも3日目に死す。といったひどい状況が毎日です。

ガザでは「WCNSF (家族がいなくなってしまった受傷児)」という言葉が定着してしまっているほど多くの子ども・女性が被害を受けている状態。

爆撃で粉々のなった街、住宅・家もなくなってしまうガザの中でも明るく・元気に振舞っている子ども達はかわいいと。そんな子ども達が1ヶ月に6000人、1日で134人、10分間で1人のかわいい子供が死んでいく《殺されていく》非道状況。

物はまったく不足、夜間はドローンの音(空爆のための)、寒くて暗い夜・・・3週間で4kg体重が減り精神的にも・肉体的にも疲弊し、ストレスがたまってくるのが分かる状態です。でもガザの人々は毎日がこのストレスの中での生活が強いられている・・・

ナセル病院が包囲されだし危険が迫っていると中嶋さん達は12/7 ラファアから出たとのこと。

ガザの経験から中嶋さんは言います。「人道的援助は大切だが戦争が続いている状況では焼け石に水。」「人道援助といった中途半端なものはダメ。根本的には停戦だと思いました。3万人近い人々が死亡している。そしてその倍以上の人が負傷している。水なし・家なし・食料なし・燃料なし・電気は来ない。問題の解決には“即時・持続的停戦”が必要なのです。」と。



MSFは主張します。“即時持続的停戦”“医療施設を攻撃するな”“医療の保護を”と。ひどいことに、ガザでは堂々と医療施設が攻撃されており、国境なき医師団の医師も3人なくなっているとのこと。その医師が残した言葉「私たちはできる事をしてきた」「わたしたちを忘れないでください」に胸を締め付けられます。

ガザ南部の医師の言葉『家族で生き残ったのはこの子だけ』がガザの状況をよく示していると思われました。

質疑応答でQ国際司法裁判所がイスラエルに対しジェノサイドをしないように命じたがこの判断に基づいてどう行動するのですか?との問いに中嶋さんは「国境なき医師団の中立・公平性の立場からあくまでも事実を伝えていく。人間性にフォーカスした形で訴えていく。そして証言活動をきちんとやっていきたい」と答えました。

子ども達が、女性が、多くのパレスチナ住民がイスラエルの爆弾の下で3万人近く死んでいる現実。これをどう自からへの問いとして答えていくのか・・・

国際裁判所イスラエルに命令する：“ジェノサイドを防げ”

南アフリカ共和国が“ガザ地区のイスラエルの攻撃はジェノサイドに当たる”とって国際司法裁判所に提訴していました。

2024年1月26日国際裁判所(ICJ)はイスラエルに対して“暫定措置としてジェノサ

イド行為を防ぐすべての手段を講じるよう”命じました。

裁判所が即時停戦には触れなかったことについてはガザの避難民はがっかりしたとのこと。

しかし緊急的な仮処分とはいえ命令には法的拘束力はあるのだからイスラエルは命令に応えるべきです。



イスラエルへのBDS(ボイコット・投資引き上げ・制裁)を!

BDSのひとつとして、国際司法裁判所の仮保全命令の効果が現れ、パレスチナ最大の軍事企業エルビット・システムとの協力覚書を伊藤忠商事(2/5)、日本エヤークラフトサプライ(2/9)が終了させました。ベルギーのフロン地域政府がICJの命令を理由にイスラエルへの2件の武器輸出許可を停止。スペインもイスラエルへのすべての武器輸出を停止。

イスラエルはイスラエルの武器メーカーボイコットを恐れているとのこと。

イスラエルのパレスチナへのジェノサイド・アパルトヘイト・軍事攻撃をストップさせるために、**BDS**を日本政府も実行するよう要請していきましょう。市民も実践しましょう。

外務省への要請行動

——UNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)への支援拠出金の

停止を即時解除して資金拠出を再開してください——

「2023年10/7ハマスがイスラエルを攻撃した際、アンルア(UNRWA)の職員が係わっていた」とイスラエルが主張。

この表明に対して即、米国・ドイツ・英国・日本・カナダ・オランダ等15カ国がアンルアへの資金拠出を一時停止しました。停止が続けばアンルアの難民救済活動が出来なくなります。

ルウエーは「今支援をやめればガザ住民の人道支援は著しく悪化する」「12人のテロ関与(?)によってガザの13000人いる職員が活動できなくなるのはおかしい」として各国に拠出を続けるよう呼びかけています。

国連では事実関係・実態を調査中です。

今、ラファに難民が殺到しており、もともと30万人ほどの人口の所が140万人に膨れ上がっている。トイレは300人に1つ。シャワーは3000人に1つと衛生状態も悪くなっている。水・食料・燃料・医療品などの備品が遮断されることは生命に係わるきわめて深刻なレベルに直面してしまう。



2024年2月16日外務省に要望書提出(市民と議員で)

人道的な見地からも又、国際司法裁判所がイスラエルに対してジェノサイドを断つように命令していることから、パレスチナの子供達の命をつなぐために一日も早く拠出金の再開をするよう外務省に要望しました。

パレスチナ自治区の駐日パレスチナ常駐総代表部を訪れ

フリード・シーム代表と意見交換(2023年11/10)



シーム氏は開口一番「私はパレスチナ問題を紛争とは呼んでいません。これは75年間にわたって過去から今に至るまで現在進行形で続いている問題です」「国連は1948年から今日に至るまでこの問題と関わっているけれど、安保理の決議にイスラエルは1つも今まで守ってきていません」と。

そしてハマスに対しては「パレスチナ自治区」のPLOとは違う組織であり自分たちとは別のものと言うことを示したいのか、「イスラエルもアメリカもハマスがテロリストのグループだというふうに言っていたにもかかわらず、この選挙(2006年)をサポートしたのです」「アメリカとイスラエルの目的はハマスをこの選挙に参加させることによって、その後この政府は受け入れないという風にならざるを得ないことになってパレスチナの分裂を導くというものだった」だから「イスラエルはどちらかの勢力を自分たちの都合で弱くしたり強くしたりというようなコントロールを行っていて、このようにしているうちには統一の政府、2カ国化解決などと言うものは実現できないようになっているのです。」とハマスとの関係を説明しました。

そしてパレスチナ問題の根本問題は「パレスチナの地をイスラエルが軍事占領し続けていることです」と、1948年以降のイスラエルの違法性を批判しました。

パレスチナのアラブ人には元の家への“帰還権”(国連も認めている)があるのに…と。

「ネタニヤフのもくろみは、このガザに暮らしている220万人の人々をシナイ半島のほうまで移動させる。この強制移住と呼ばれるもので…ガザを完全に更地にし新しく入植地を作る。この強制移住・デイスプレースメントは国連の法律にも人道支援法にも反しているのです」と現状の違法性も指摘しました。

「今現在、ガザでは食べ物もない、水もない、薬もない、病院も閉まっている、親のない子どもであふれているのです。私自身も26人の友人を失いました。イスラエルは病院を攻撃している。15分ごとに1人の子供が亡くなっています。」と厳しい状況を語りました。

「日本の出来ることは？」との私たちからの質問に対して、シーム代表は「BDS(ボイコット・投資引き上げ・制裁)をすぐにでも始めてほしい」と訴えました。

そしてシーム代表は現状について率直に語りました。「私自身はハマスではありません

し、ハマスに反対している立場ではありませんけれども、わたしは今現在あのイスラエルに対してはガザで闘っている人たちと共にやりたいと思います。というのは彼らは自分たちの土地・自分たちの水を守るために戦っているからです」「ハマスだとかハマスじゃないとか、そういったことは忘れてもらいたいです。彼らは自分たちの生き残りをかけて戦っているのです。…自由のために戦っている。自分たちが生き残るために自分たちを守るために戦っているのです」「彼らはもう家族を失ってしまって、もう失うものがないという状態なのです。だから戦っているのです」と。

ユダヤ人とアラブ人との関係についても「私の叔父もユダヤ人の女性と結婚しています。私達はユダヤ人と一緒に暮らすことに何の問題もない。」「ユダヤ教という宗教とは違う“シオニスト”が問題なのです。シオニズムはイデオロギーなのです。シオニストは“私達は『光の民』でかれらは『闇の民』だ」と。闇の民とはユダヤ人以外のすべての人のこと」「私達(パレスチナ人)を人”間の皮をかぶった動物“と、”ガザの人間を全滅させる“と言ってるのです」と私たちがパレスチナを見るとき重要な視点・観点を示唆してくれました。

羽場久美子さんパレスチナを語る:

「共同テーブルシンポジウム」で羽場さんは語りました(2024年1月18日)

2024年1/9 現在2万4000人ももの死者が出ているガザ。現地では「我々は数ではない。一人一人が殺されていっている。誰も助けてくれない」という声が…南部のラファを空爆しているイスラエル。

羽場さんは「何故イスラエルのジェノサイドを止められないのか」と訴え、イスラエルとパレスチナとの戦いの背景を説明しました。

2023年12月国連事務総長による“即時停戦”に対し153カ国が支持。安保理でも15か国中13カ国が支持。イギリスは棄権。アメリカは拒否権発動して停戦実現を拒む。「イスラエルの空爆を支持するのはアメリカだけ」「アメリカ～イスラエルの関係性とアメリカの戦略を見ていかねば」と。

そして「ハマスはテロリストと言うが、2006年ガザの選挙で選ばれた政体。この政体を認めないできた米・英の民主主義とは何なのか?アメリカからの支援や武器でパレスチナの人々が殺され続けているのが問題だ」と現状を分析しました。



小田切拓さんは「パレスチナ人強制“追放計画”」を語る。

(共同テーブル1/18・週刊金曜日)

ガザの状況をイスラエルの内部文書から語りました。その「ガザの民間人に関する政策方針の選択肢」の内部文書では軍事行動後のガザ地区の統合の仕方が出ていま

す。

『A:住民がガザに残留しパレスチナ自治政府に統括を』ではなく、『B:新たなアラブ人当局に統治を』という方法でもなく、『C:住民をガザからシナイ半島へ避難させる』方向を取ろうとしていることが明らかに。



Cの方法として、エジプトに対しては避難民キャンプの施設を、欧米にも避難民対応に責任を持たす。

何よりも「ハマス指導のせい」で、他の土地に向かう以外に選択肢がない。だから帰還する望みはない」と思わせるように大手広告代理店を使っただけでガザ住民への情報キャンペーンも考えているのです。

ガザ北部全体がイスラエルの空爆で何もかも壊され生存不可能となった状況で…人道支援の名の下ガザ地区住民の域外への避難が国際社会の承認や費用負担で進められればまさにイスラエルの狙い通りとなるのです。

イスラエルのパレスチナ人強制追放計画から、イスラエル(シオニズム)のパレスチナへの攻撃の本質を示唆しました。

フリーフリーパレスチナ!! ストップストップジェノサイド!!



「民主と自治そして平和主義」藤代政夫

047-445-9144

*活動報告 HP に掲載「いい鎌ヶ谷ふじしろ政夫」でアクセス出来ます